

僕はあの日からもしもの時を想像し、運転している。五年生のとき友達と遊ぶため自転車で公園へ向かっていた。公園のすぐそばには急な下り坂がある。僕はそこを歩いている、公園にはいろいろと、ぐっとハンドルをきると、僕は横に自転車ごと倒れハンドルについていたベルで唇を強打し、顔のりんかくがおかしくなるほどはれてしまった。だが、この事件は不運とも幸運とも言える。僕はその二週間ほど前、誕生日プレゼントとして、ヘルメットを買ってもらっていた。そのときヘルメットをかぶっていたから頭には怪我をせずにすんだ。そのヘルメットは先端はえぐられ、固い所もボロボロの状態だった。僕はその日、ヘルメットをつけていなければ、大怪我、または、死んでいたかもしれないのだ。その日、僕は、ヘルメットの大切さが痛いほど分かるようになった。

僕がヘルメットを買ってもらったのは令和五年の四月からヘルメット着用の努力義務が課される少し前だった。努力義務が課されたおかげか僕の回りの友達もヘルメットをつけ始めた。しかし、まだヘルメットを着用していない人も多い。そんな人に僕は、

「もしもの時のためにヘルメットはしとけ。」

と言う。でも、

「大丈夫。事故なんかしないよ。」

と言う人がよくいる。たしかに、事故がおきなければそれでいいのだ。事故がおきなきゃ安全だし、ヘルメットをする必要などない。と、一瞬こう思う。しかし僕は「でも、もしもの時があるだろう。」

と、こう言うだろう。この「もしもの時」というのはいつ来るか、またどんな時に来るのかは分からない。しかし想像することはできる。例えば、急カーブがあるときは勢いあまってこけるかもしれないと想像して、ブレーキをかけるなど。もしものことを常に想像して車、バイク類を運転すれば事故を大幅に防ぐことができるはずだ。

事故をしてしまうのは大きな大きなデメリットがいくつもある。自分が怪我をしたり、乗り物が壊れることもある。人に迷惑かける事も多々あるだろう。事故を起こしても何一ついいことがない。逆に考えると事故をせず過ごすのはすごく大切なことだ。

もしもの時というのは起きてからではもう遅いのだ。だから常にもしものことを考え、想像することが大切だ。事故をしないように、他人に迷惑をかけないように、そして何よりも家族を心配させないように。

もしもの時を想像するというのは何も交通安全に限ったことじゃない。勉強や仕事など、

「もしもこういうことが起こったら・・・」

と考えて、用心深く何かをすることはすごく意味があるはずだ。このことから僕はふと考えてみた。車やバイク類を乗っているとき、意識してもしものことを想像するのはなくそれを習慣にするのが大事だと。そのことが分かって初めて、ヘルメットを着用した方がいいという話になるだろう。

このことはだれも人事で済ましてはいけない。乗り物に乗っていなくてももしもの時はある。皆さんも、もしもの時を想定したヘルメットの着用と、もしもの時を常に想像して事故を防ぐことについてももう一度考えてみてはどうだろうか。